

# 障害のある子どもの教育素材としての「馬」がもつ可能性

加藤 守松

(愛知県立名古屋養護学校)

## はじめに

私は、大学時代の四年間に馬術部に所属していた。さらに、就職し知的障害養護学校に赴任した後もたびたび馬場に通り後輩の指導にあたってきた。結果として約10年の乗馬経験であったが、馬術部での活動を通して馬場馬術や障害飛越の技術、馬の飼育管理等についてそれなりに知ることができた。

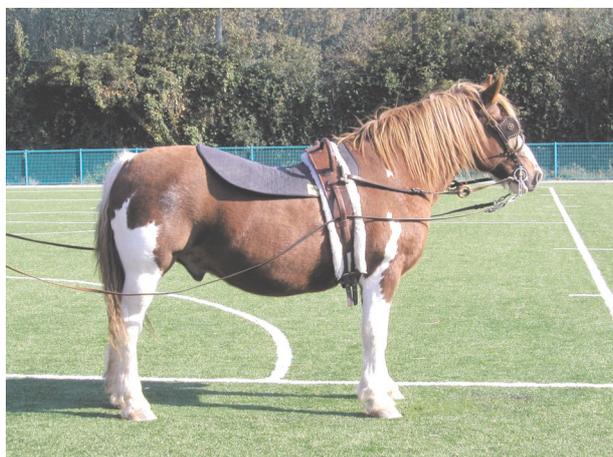
平成5年に国立久里浜養護学校に赴任し、隣接する国立特殊教育総合研究所で取り組まれている「乗馬療法」にかかわるようになった。自分の経験からすれば、初心者で馬術を始めた場合常足から駈足まで含めて二蹄跡運動を一通り自分でこなせるようになるまで大学生でも3年間はかかる。当初「乗馬療法」なる言葉も知らず、高度にバランス感覚の要求される、複雑なスポーツとしての馬術しか知らなかった自分は障害のある子どもがどのように馬に騎乗するのかとても興味をもった。

ここでは、乗馬の経験者として、また、障害児教育にかかわる者として「馬」がもつ可能性について考えたい。

## 1. 「乗馬療法」の取り組みと自分の役割

国立特殊教育総合研究所での馬を使った指導にあたっては、中半血種の大型の馬一頭（体高約150cm）と小型のポニー（体高約110cm）の二頭を中心に行っている。また、必要に応じてさらに違う馬を用意する場合がある。活動場所としては、約45m×約20mの平地での角馬場を想定し、各隅角にポイントを置いて運動の際の目当てとする。

中半血種の大型の馬には軽乗鞍を使用し、ロングレーン



(長手綱)による後ろ手綱によって馬を制御する。指導者は、騎乗した子どもの左右にそれぞれ一名ずつ馬と平行して歩行する。そこで、子どもの状況に応じて手をつないだり、足を支えたりしながら課題を提案していく。私は、ロングレーンを持ち、馬の直後に立って馬を制御していく。

子どもに提案される具体的な課題は、左右を平行して歩く指導者から口頭であるいは、身振りなどでやり取りされる。馬の制御者としての私は、指導者からの要請により、必要に応じて歩度を変えたり、巻乗りをしたりして馬に運動を指示していく。

活動は、土曜日と日曜日の二日続きを基本として行い、子どもたちは自分の予定された騎乗時間に保護者と一緒に馬場に集合する。一人の騎乗時間は、一日2セッション（間に休憩を入れて二鞍）全体で一時間は越えない。一回のセッションは、20分程度を目安に行われ、①馬との出会い、②騎乗および運動、③騎乗後の馬とのかかわりにより大きく構成される。

### (1) 馬との出会い

馬との出会いでは、子どもが馬に注意深く近づき、馬の肩や胸を手で触り言葉をかけながらあいさつをする。顔を近づけて匂いをかいだり、馬の目を覗き込んだりする子どももいる。馬の大きさに驚いてなかなか近づけない子どももいる。指導者は、馬との出会いでは、子どもの気持ちをその様子から読み取りながら主体的に活動できるように静かに見守る。また、こうした時間をかけた馬とのやりとりと触れた子どもの体から子どもの騎乗に対する意欲やその日の体調などを読み取っていく。もちろんその場限りの実態把握にとどまらず、その子の過去の騎乗経験との比較、その場にいたるまでの生活の様子までを保護者からも聞いて把握しておく。

馬の制御者としての私は、ここで以下のような配慮をしている。まず、馬をその場で動かないように留め置くことである。子どもによっては、声を上げたり、急に駆け寄りたりして馬に近づく場合がある。また、不用意に馬の斜め後方から接近することもある。指導者が馬と子どもの間に入って配慮していても、突然の物音や周りの人の動きに馬がまったく動じないとは言えない。前足で地面を搔いたり、腹についたアブを追い払おうとしたりすることもある。体重800kgを超える馬体であり、馬に悪気がなくてもそのわずかな動きに子どもが接触したら大変である。いつでも子

どもたちが安心して馬に近づけるように、特に馬の足もとの動きには目を離さず、足を踏みかえることすらないように細心の注意が必要である。また、長時間の活動に馬が集中力を失わないように絶えず言葉かけをしたり、尻を愛撫したりして励ましている。

## (2) 騎乗および運動

騎乗および運動では、子どもが指導者により抱き上げられて馬の背にまたがる。自分から軽乗鞍のハンドルを持ち半ばよじ登る子もいる。特に股関節が十分に開かない子には、足首や膝頭などに指導者の手をあてて時間をかけて馬体になじませていく。次に子どもの発声や挙手により馬を発進させる。運動は、角馬場内の蹄跡を常歩で前進することを中心に直径8mの小さな円を描く巻き乗りや停止、斜め手前変換や半巻き乗りなどを行う。さらに、子どもによっては、速歩も部分的に取り入れる。こうした運動をしながらも子どもたちは、馬の背中でおお向けに、後ろ向きに、横向きにさまざまな姿勢変換を行い、両手をハンドルから離し水平に広げたり、平行して歩く指導者と手をつないだりとさまざまな課題に取り組む。

馬の制御者としての私は、ここで以下のような配慮をしている。まず、発進にあたっては、子どもからの合図を受けてゆっくり丁寧にまっすぐ馬を進めることである。特に初めて馬に乗る子どもについては、緊張感が強いのでゆったりとリラックスして進めるようにする。その後は、子どもの側方を歩く指導者から馬に与えられる指示を的確に馬に伝えることが大切であり、必要な速さでタイミングのよい運動を馬に求めていく。基本的に馬の後方から子どもの背中を見る位置にいる私は、子どもの左右への傾き加減を一番知り易い。また、馬によって揺さぶられる体幹部の様子からその子の緊張具合を読み取ることができる。そうした情報は、素早く指導者に知らせることも必要である。また、子どもの様子を見ながら歩度を次第に伸ばして、できる限りいつもリズム感のある馬の反動を提供できるように心がける。蹄跡行進や円運動については、直進性やゆるやかな減脚や停止ができるように配慮が必要である。

## (3) 騎乗後の馬とのかかわり

指導者の援助によって子どもたちは、馬上でたてがみや、首すじをなでたりしてから下馬する。子どもたちは、騎乗する前と同じように自分なりの方法で馬の体に触れてその労をねぎらい、保護者のもとに帰っていく。

馬の制御者としての私は、ここも騎乗する際と同様に子どもたちが安心して馬の周りにいられるように配慮をしている。こうした、一回のセッションを一人につき二回、一日8人程度を二日間行う。十分調教された馬ではあるが、馬にも感情があり、体調もある。したがって、馬のしぐさ

や歩様を十分観察し、言葉かけや手綱による指示への従順さを絶えず読み取りながら馬を制御する。できる限り馬を疲労させないように、また、甘えさせないよう時には厳しく接していくことが大切である。

## 2. 馬の特性

今までに「乗馬療法」の取り組みとロングレーンで馬を制御する自分の役割を中心に述べてきた。しかし、こうした療法的な馬の活用以外にも障害者乗馬やスポーツとして馬術がある。いずれにしても一般的に馬術といわれる馬の調教と飼育管理が基本にあり、その上で乗馬療法や障害者乗馬などのジャンル分けができると考えられる。そこで、馬の調教と飼育管理について考えることで、馬の特性を明らかにし教育素材としての可能性を探ってみたい。

### (1) 馬の種類と調教

馬術とは、人間の何倍も体重や力のある馬を自分の意思のままに操ることである。競技としては、決められた規定運動をこなす馬場馬術や障害を飛ぶ障害飛越、さらに両者を組み合わせた総合馬術が主にある。それぞれ馬の調教の程度や騎乗者の技術により各競技とも難易度に差異があり、より細かな競技種目が競技会において設定されている。騎乗者と別な意思をもつ生きた馬にまたがり、ある時は助けられ、また、ある時は励ましながらもいわゆる人馬一体となって運動をこなすことに馬術の面白みや楽しさがある。

そこでこうした馬術で大切なのが、まず馬の種類であり、馬の調教程度である。馬の品種の分け方については、いくつかあるが、おおむね軽種、重種および在来種などに分けられる。軽種には、競馬に使われるサラブレッドやアラブなどがあり、重種はベルシュロンなどの大型の挽曳馬がある。在来種には、木曾馬や対馬馬などがあり、他にもいわゆるポニーとよばれる小型の馬もいる。それぞれに体の大きさや足の運び方、気性に品種としての特性があり、乗馬に適するものも限られている。したがって調教により、歩様や馬体の柔軟性がより伸長したり、改善されたりはするが、その馬の本来の持って生まれた天分はある。馬場競技に向く馬もあり、障害飛越競技に向く馬もいる。

乗馬療法においても、騎乗者の体格や技術にあった従順な馬が一番に求められる。つまり馬の体高や馬体の幅、歩様による反動の違いは、騎乗者の股関節の開き具合や求める課題に大きく影響する。さらに、乗馬ともなれば、馬の調教の程度によりこなせる運動が異なってくるが、脚や拳の動き、さらに騎座による複合的でより高度な扶助が騎乗者の技術として求められる。

## (2) 馬装と基本的な運動

馬に乗るためには、鞍を置き、水勒などの馬具をつける馬装を行う。鞍や勒なども馬の大きさ、求める運動などによりさまざまな種類があり、必要に応じて組み合わせで使用している。いずれにしても、馬装の前には、馬体にブラシをかけて毛並みを整え、鉄爪で蹄底に詰っている異物を取り除くなどの準備が必要であり、運動をした後の手入れも同様である。さまざまな道具を蹄や馬体の部位に応じて扱っていく。また、馬にもさわられて不快な箇所もあり、馬の挙動を絶えず読み取りながら、言葉がけをしながらかわっていかなければならない。

馬場馬術における基本の運動としては、常歩、速歩、駈足の歩度の変換、発進、後退、停止などの移行、半輪乗り、輪乗りがある。さらに肩を内やハーフパス、後肢旋回などの二蹄跡運動、踏歩変換などより高度な運動もある。これらの運動は、調教として適正な衝撃による屈とうと馬体の柔軟性、前進氣勢の養成をめざして行われる。また、こうした運動を基本にして障害飛越などの運動につなげて行く。その他にも徒歩で行う引き馬や調馬索運動もある。

これらの活動は、馬の調教として行われる側面と騎乗者の技術習得の側面とがある。また、教える側であり、教えられる側の関係を越えて馬と人が互いに相互作用を及ぼしている。そこでは、単に技能的な扶助のやり取りだけでなく、情動を含めた感情的な意思のやり取りが騎乗者と馬との間でなされている。

## (3) 馬の飼育

馬術を広く捉えるならば、適切な調教と厩舎での飼育管理を含めることができる。馬が、生き物である以上毎日の水与や飼付けなどの厩舎作業、病気やけがへの対処などの馬体管理も大切である。馬を制御する技術ばかりでなく、馬の生理や習癖を十分知って不必要な事故やけがが起きないように互いに快適な関係を作り出すことも大切である。

厩舎作業では、馬が馬房の中で快適に過ごせるように馬の糞を取る（ポロ取り）や寝薬を干したり、あるいはおが粉を入れたりをしなければならない。引き馬や放牧など適切な運動と清潔な馬房環境は生き物である馬には欠かせない。馬が馬房内にいる時も絶えず声をかけながら蹴癖や咬癖に注意しながら行わなければならない。疝痛や跛行など馬がかかりやすい疾病についても日々の生活の中から事前に把握し、獣医師や装蹄師と連携をとりながら対処していく。

## 3. 教育素材としての可能性

ここでは、自分の経験を踏まえて障害のある子どもたちにとって馬がどのような可能性をもっているのかを考えたい。

## (1) 肢体不自由のある子どもにとって

不規則に揺れる馬上では、適切な指導者の補助により、腰を中心に体幹部をバランスよく自分で支えることが求められる。乗馬療法としてかかわる馬には、バルーンや固定遊具、感覚遊具では味わうことができない前進氣勢のある加速度を伴った前後左右の揺れを利用することができる。さまざまな大きさの馬を用意することで子どもの体格や股関節の状態に合わせることができる。常歩や速歩などのリズムカルな反動や巻き乗りや半輪乗りでの遠心力、停止や発進の際の加速度を組み合わせる運動することは、まさに生きた馬でしか体感できない。馬上で無理なく楽に乗れる正しい姿勢は、歩行動作の上肢のバランス感覚に近いと考えられる。馬に乗っていたいと思う子どもの気持ちを育てることで結果として姿勢動作が変化してくる。適切な指導により股関節の緊張を軽減したり、こう縮した足首をゆるめたりすることができる。

指導者から子どもへの課題は、提案として言葉や身振りにより伝えられる。子どもは、馬上で揺れに対処しながら自己決定し、課題をこなそうと身体各部を意図的に動かそうと努力する。こうした馬の動きを介したやりとりは、子どもと指導者、子どもと馬との関係を通してコミュニケーション能力の向上にも結びついている。重度で肢体不自由のある子どもたちにとっては、特に乗馬療法としての丁寧な馬のかかわりが有効ではないかと考える。

## (2) 知的障害のある子どもにとって

知的障害のある子どもたちにとっては、馬に騎乗するばかりでなく、馬装や厩舎作業などのかかわりも場合によっては有効である。前述のように馬術には、調教以外にもさまざまな作業場面が展開される。大型動物としての馬を扱うため配慮や制限はあるにしても、生き物の世話をすることは有意義であろう。特に、自閉症といわれるコミュニケーションに課題のある子どもたちにとっては、馬とのかかわりにより新たな側面をひきだす可能性がある。すなわち、馬に騎乗することが感覚遊具としての楽しみを含むこと、人でも物でもなく、愛着関係の対象として馬にかかわることができるからである。えさを与えたり、ブラシをかけたりするさまざまな場面は、うさぎや小鳥などの小動物の飼育と変わることはない。しかし、その背中にまたがることができ、手綱や脚などの扶助を通して複雑な運動までこなす事ができるのは馬でしかできない。馬に乗りたいという意思や馬への愛着関係は、すべて馬にかかわる指導者を通じて騎乗場面や厩舎作業場面で育てることができる。具体的で目的をとらえやすい馬にかかわる活動は、知的障害のある子どもにとっても取り組みやすいのではないかと考える。

#### 4. ま と め

自分の経験を通して教育素材としての馬の可能性について考えてみたが、障害のある子どもが馬に乗るためには解決しなければならない課題も多い。まず、どこで馬に乗るかであり、指導者はどうするのか、金銭的な問題はどうかである。現在では、乗馬クラブの数も多く、RDAJapanの援助を受けながら障害のある子どもを馬に乗せることに取り組んでいる所も少なくない。しかし、それぞれにふさわしい適切な調教を受けた十分な頭数の馬をそろえられる乗馬クラブは少なく、試行錯誤の中で馬に乗せている所も多い。障害のある子どもたちを十分理解し、馬の特性を知った上で補助や指導ができる人も乗馬クラブではまだまだ少

ない。

学校として馬に乗る活動を取り入れているところも出てきている。騎乗する場面から厩舎作業までの多様な馬にかかわる活動のどこの部分を利用し、教育課程の中でどのように位置付けていくのかも各校独自に工夫をしているのが現状である。

馬にかかわるためには、解決しなければならない課題が多い。しかし、障害のある子どもにとっての「馬」は、いくつもの可能性を秘めている。今後も、地域の乗馬クラブをうまく活用していくことで障害のある子どもが家庭で、あるいは学校で馬にかかわることができる機会が一つでも増えていくことが望まれる。